

幼稚園・保育所における 乳幼児の適正人数に関する研究 (その2)

乳幼児の生活状況の分析をもとに

新井美保子

Mihoko ARAI

幼児教育講座

研究目的

前回は、愛知県内の幼稚園および保育所に勤務する保育者を対象とした調査をもとに、1クラス当たりの乳幼児数の実態や、保育者が考える1クラス当たりの最適乳幼児数、保育者一人当たりの担当最適乳幼児数などについて報告した¹。ここでは、公私立別や年齢別の結果の概略について明らかにできたので、今回は、保育者の経験年数との関連や保育者の適正人数に対する考えを探るなど、最適乳幼児数についてより詳細に分析して明確化していきたい。また、適正人数を考える上で、乳幼児の状況は大きく影響してくると考えられる。そこで、現在の乳幼児の生活状況を同調査から明らかにし、適正人数を検討する資料としたい。

1クラス当たりの最適人数

1 最適人数と最頻値

前回の報告では、年齢別および公私立別について主として最適人数の平均値をもとに考察した。そこで、今回はまず年齢別の最頻値に注目することで、最適人数の手がかりを得たい。

図1～9は、各年齢における1クラス当たりの最適人数についての頻度を示したものである。3歳未満児クラスの図1～3は、保育所の回答を集計したものであり、図4～9は保育所・幼稚園別に掲載した。これらを見ると、前回報告した通り、保育者が最適と考える人数は幅広いことが改めてわかるが、回答者数が増える2歳児以上は、1ないし2つの回答に集約される傾向がわかる。具体的には、保育所では2歳児は15名、3歳児も15名、4歳児は20名と25名、5歳児も20名と25名である。幼稚園では3歳児は15名と20名、4歳児は25名と20名、5歳児は25名と20名、30名である。最頻値で判断すれば、保育所では2歳児および3歳児は15

図1 0歳児の最適人数(1クラス当たり)

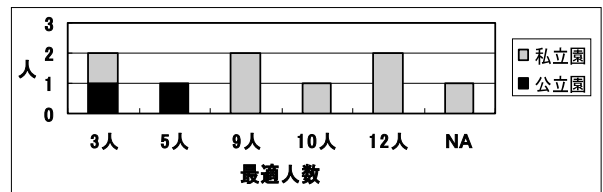


図2 1歳児の最適人数(1クラス当たり)

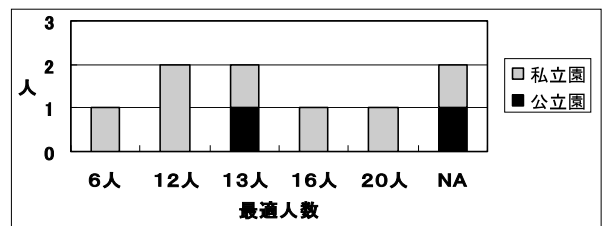


図3 2歳児の最適人数(1クラス当たり)

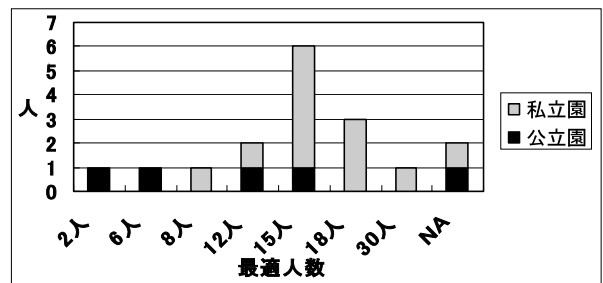
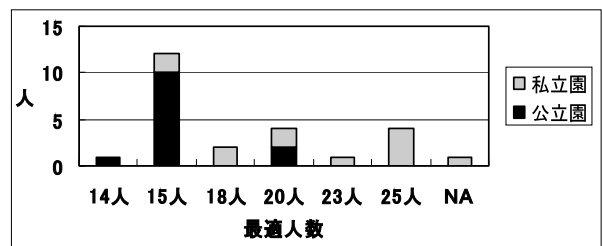


図4 3歳児の最適人数(1クラス当たり・保育所)



1 拙稿「幼稚園・保育所における乳幼児の適正人数に関する調査 愛知県内の保育者を対象とした意識調査から」愛知教育大学研究報告, 第56輯(教育科学編) pp. 33~36

調査有効回答者数は、公立幼稚園61名、私立幼稚園21名、公立保育所62名、私立保育所75名、合計219名。

図5 3歳児の最適人数(1クラス当たり・幼稚園)

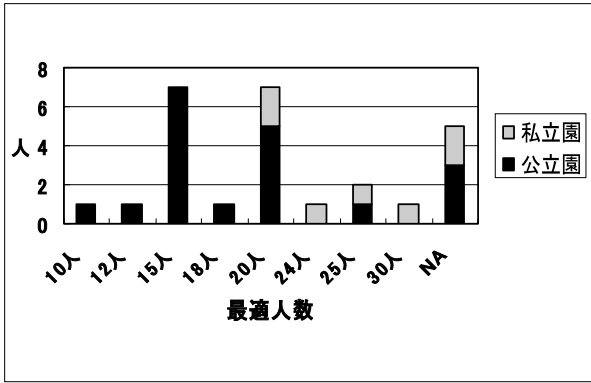


図9 5歳児の最適人数(1クラス当たり・幼稚園)

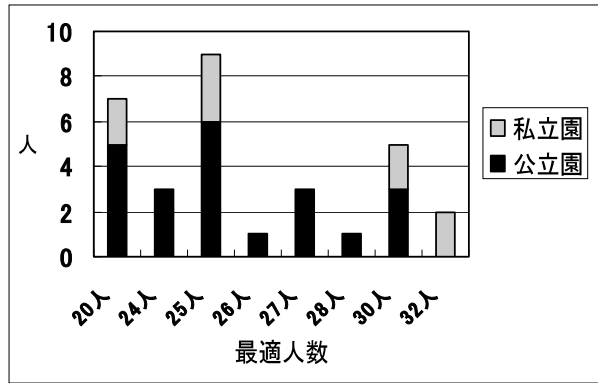


図6 4歳児の最適人数(1クラス当たり・保育所)

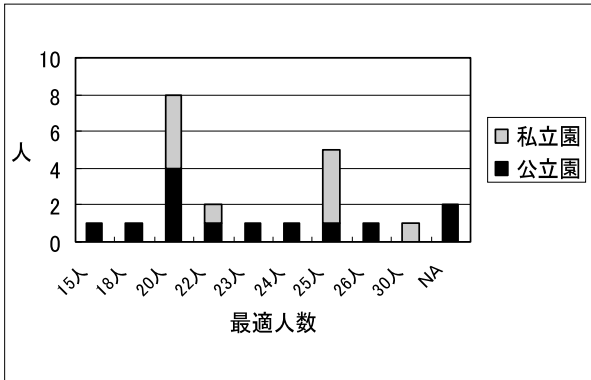


表1 勤続年数別1クラス当たりの適性人数(保育所)(人)

	1-5年	6-15年	16年以上
0歳児	10.3	6.8	5.0
1歳児	12.5	13.4	—
2歳児	18.6	11.3	13.3
3歳児	18.4	20.8	15.0
4歳児	23.1	21.8	20.7
5歳児	23.4	22.1	22.0

図7 4歳児の最適人数(1クラス当たり・幼稚園)

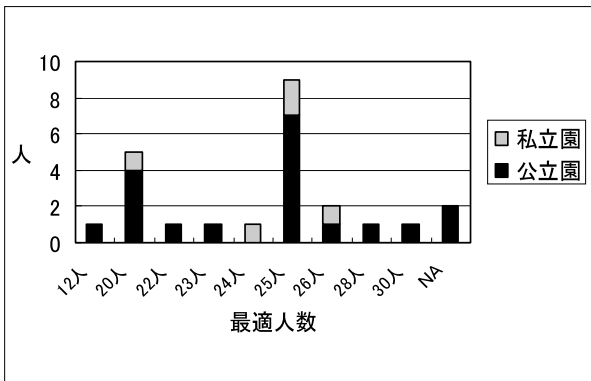


表2 勤続年数別1クラス当たりの適性人数(幼稚園)(人)

	1-5年	6-15年	16年以上
3歳児	16.5	20.8	15.0
4歳児	23.1	22.7	25.3
5歳児	25.2	26.2	24.8

図8 5歳児の最適人数(1クラス当たり・保育所)

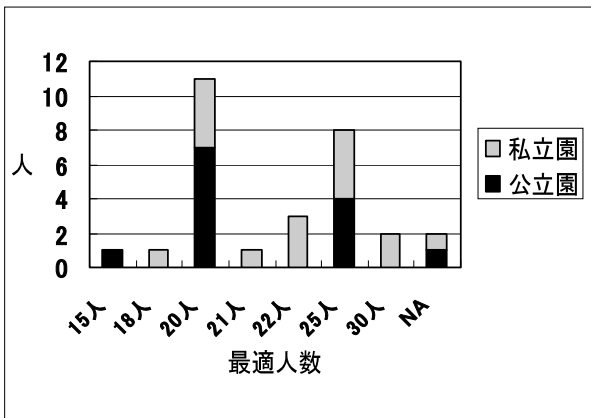


図10 勤続年数別1クラス当たりの適性人数(保育所)

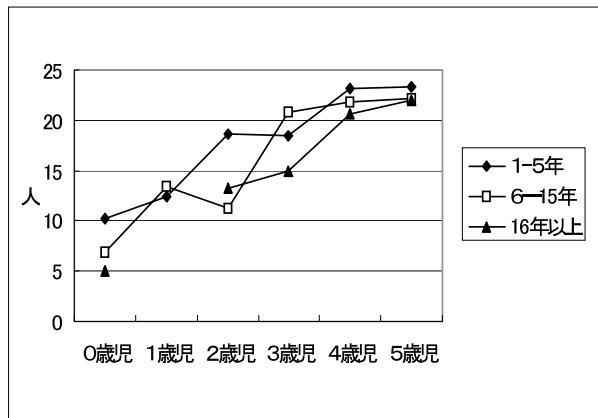
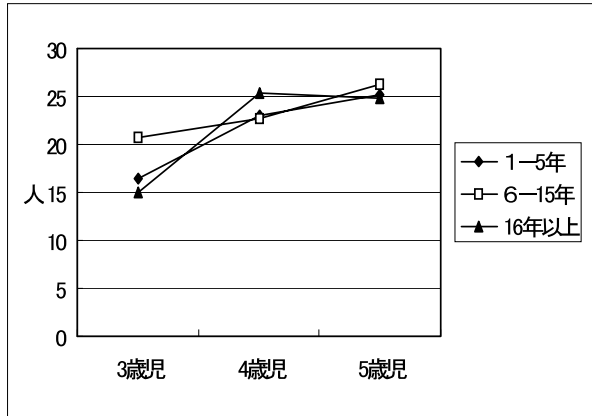


図11 勤続年数別1クラス当たりの適正人数（幼稚園）



名、4歳児および5歳児は20名が1クラス当たりの最適人数といえるであろう。一方幼稚園では、3歳児は15名または20名、4歳児および5歳児は25名が最適人数と判断できる。保育所と幼稚園を比較すると、特に4、5歳児において差が見られ、幼稚園の方が適正人数を多めに捉えていることがわかる。やはり福祉施設と教育施設というそれぞれの機能に適したクラス規模があり、それをふまえた設置基準を策定することが求められているといえる。

2 保育経験年数と最適人数

1クラス当たりの最適人数と保育者の保育経験年数との関連性について次に検討する。

保育者の保育経験年数により、A（1～5年）、B（6～15年）、C（16年以上）に分類して、考えられる最適人数の平均を集計したところ、保育所は表1と図10、幼稚園は表2と図11に示したとおりとなった。経験年数と最適人数の回答には明確な関連性があるとはいえないが、特に保育所においては全体的に経験年数の浅い保育者は最適人数を多く回答し、ベテラン保育者は人数を少なく回答する傾向がみられた。ベテランならば多人数を保育できるというわけではなく、むしろ、長年の経験を元に最適人数を判断しているのではないかと考えられる。

3 最適人数と考えた理由

では、最適人数と判断した理由は何か。前回は概略を述べたが、「保育者一人で目が行き届く人数（十分な対応ができる、関わりがもてる、向き合える等）」という回答が、全ての乳幼児の年齢を通じて最も多く見られた。また、乳幼児の年齢が上昇するにつれて「集団遊び・友達との関わりが楽しめる人数（少なすぎるとは友人関係が築きにくい）」という回答が多く見られた。また、これらの双方を指摘した回答「子ども同士もつながりを深め刺激しあえる人数で、保育者も一人ひとりと関わりを持って学級経営ができる人数」や、「部屋が狭いので、見た目にも窮屈にならない人数」「子ども

が落ち着いてゆったり過ごせる人数」などの指摘が多くあり、保育室の広さや雰囲気も適正人数の判断に関わっていることが明らかになった。一人ひとりの乳幼児としっかり向き合える人数で、乳幼児同士のつながりも深められるということと、部屋の広さに余裕があることという視点が、適正人数を判断していく際のポイントであるといえよう。

現在の子どもの様子

1 現在の子どもの様子の概要

現在の子どもの様子はどのようなものであるか。一人ひとりの子どもとしっかり向き合えることが適正人数の判断材料の1つとなっていることが明らかになったが、子どもの状況によってまた適正人数も検討していく必要があるだろう。回答保育者のクラスで、この1年、以下のような事柄を感じるがあったかどうかについて、全員に10項目、3歳以上の担任にはさらに3項目尋ね、とても多く感じた、多く感じた、どちらともいえない、あまり感じなかった、全然感じなかった、という5つの選択肢で回答してもらった。全員に質問した項目は以下のとおりである。

- A 情緒面で安定しているの子が多い
- B 熱中して遊んでいるの子が多い
- C 豊かな発想を持っているの子が多い
- D 好奇心をもち、意欲的に行動しようとするの子が多い
- E 向上心をもって、がんばって取り組む子が多い
- F 元気があり、体をよく動かして遊ぶ子が多い
- G クラスに笑いや活気がある
- H 落ち着いていて、きまりをよく守る子が多い
- I アレルギーに対する特別な対応が必要な子が多い
- J けんかやいざこざなどのトラブルが多い

3歳以上の担任保育者に追加して質問した項目は以下のとおりである。

- K 生活習慣が身につけている子が多い
- L 相手の思いに気付き、行動しようとする子が多い
- M 自分の思いを言葉等でうまく表現できない子が多い

A～Mまでの全項目の中で、肯定的な評価が多かった項目は、「G クラスに笑いや活気がある」「F 元気があり、体をよく動かして遊ぶ子が多い」であり、「とても多く感じた」とする回答が、それぞれ3割以上に達していた。また、「とても多く」と「多く」と回答を合計すると、上記のGやFは8割以上に達し、現在の子子ども達が園で心や体を解放してのびのびと過ごしている様子がうかがえる。その他、「D 好奇心をもち、意欲的に行動しようとする子が多い」や「B 熱中して遊んでいる子が多い」もそれぞれ7割近くに達して

おり、主体性をもって意欲的に生活している様子が感じられる。一方、肯定的な評価が低い項目としては、「H 落ち着いていて、きまりをよく守るの子が多い」(, の回答の合計で26.5%)「K 生活習慣が身につけているの子が多い」(同 42.6%)「A 情緒面で安定しているの子が多い」(同 45.2%)などの他、否定的な評価が高い項目として「J けんかやいざこざなどのトラブルが多い」(同 45.6%)、「M 自分の思いを言葉等でうまく表現できないの子が多い」(同 34.5%)などがあり、情緒面での不安定さや言葉等での表現力の乏しさ、社会性の発達の不十分さなどが関係して、必ずしも落ち着いた状況で保育の場で生活できているとは言えない様子がうかがえる。けんかやいざこざを経験することは乳幼児期にはとても重要なことではあるが、毎日がそれに費やされるようでは子どもも保育者も疲労し、十分な発達保障もできないであろう。一人ひとりの心情や情緒の安定につながるかわりをしっかり行い、単なる気分の発散ではなく、心身ともに健康で友達とかかわりながら遊びに十分熱中できるような援助をすることが保育者には求められているといえる。

2 幼稚園児と保育所児の特徴

それぞれの項目を、幼稚園と保育所別に比較してみると、あまり差が見られなかった項目は、「B 熱中して遊んでいるの子が多い」「F 元気があり、体をよく動かして遊ぶ子が多い」「G クラスに笑いや活気がある」であり、反対に差が見られた項目は、「A 情緒面で安定しているの子が多い」(図12)、「E 向上心をもって、がんばって取り組む子が多い」(図13)、「H 落ち着いていて、きまりをよく守るの子が多い」(図14)、「J けんかやいざこざなどのトラブルが多い」(図15)などであった。いずれも保育所児に否定的な回答が多く、家庭を含めて乳幼児の置かれている状況の厳しさを感じられる。今後は今まで以上に乳幼児の心身のケアとこの時期に身につけるべき教育を行うことを保育士には求められているといえる。また、「I アレルギーに対する特別な対応が必要な子が多い」は、多く感じるとする回答が幼稚園児では合計4.9%しか見られなかったが、保育所児では13.1%もあり、長時間保育や長期間保育に加えて、一人ひとりの症状に応じた、よりきめ細かな対応を保育士は求められていることがわかる。

まとめ

今回は、前回の報告に引き続いて保育者の考える1クラス当たりの適正人数について検討を行った。回答度数による最頻値からはより現実的な人数値が明らかにできたと思う。また、保育経験年数が多くなるとむしろ最適人数は減少する傾向にあることが予想できた。経験が浅い保育者は、保育技術も不十分な上に多

図12 A 情緒面で安定しているの子が多い

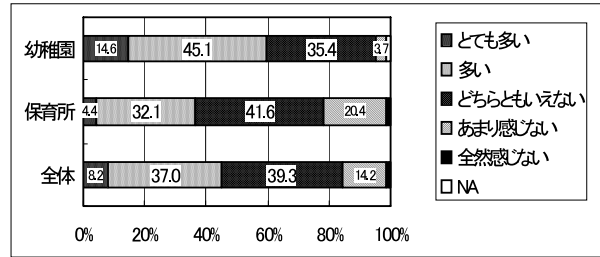


図13 E 向上心をもって、頑張って取り組む子が多い

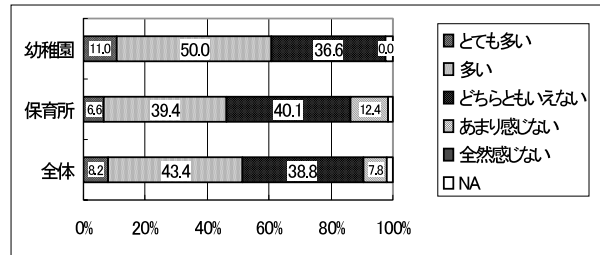


図14 H 落ち着いていて、きまりをよく守るの子が多い。

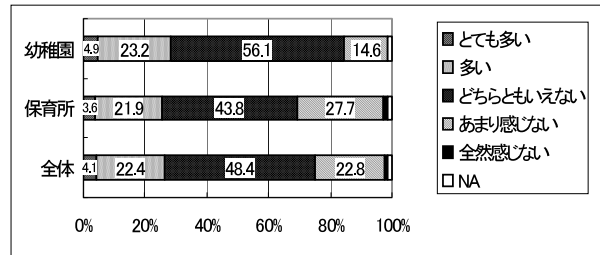
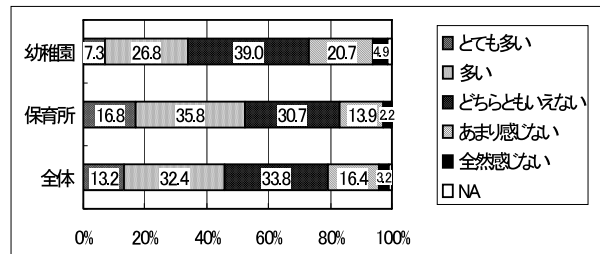


図15 J けんかやいざこざなどのトラブルが多い



くの幼児を保育することに違和感を持つことができない。改めて、保育するとはどういうことか、子どもの発達を保障するとはどうすることか、保育の質を向上させるとはどういうことか等について、保育者や行政、園の経営者等のそれぞれが真剣に考えるときに来ているといえる。

また、前回の報告で扱ったように、実際に保育している人数と適正数と考える人数とではあまりにかけ離れており、それだけ保育者や乳幼児に様々な大きな負担がかかっていることが予想できた。今回、乳幼児の生活の様子について分析したところ、特に保育所児において情緒の安定やけんか・トラブルの多さ、向上心、アレルギーなどの面で、より一層のきめ細かな対応が求められている実態が明らかになった。親の長時間労

働に伴う長時間保育，低年齢からの保育を受けて育つ乳幼児らの成長を考えると，幼稚園以上に，1対1で話をしたりスキンシップをとったり，時にはわがままとも思える感情的な行動も受け入れる余裕が保育所の保育では必要である。

幼稚園と保育所の一体化が親の都合や行政の経済的理由で実施されるのではなく，乳幼児の現状を十分に踏まえて実施されるべきことがこの調査結果からも明らかになった。そのような条件下で保育に従事する保育者が保育から離脱する前に，是非保育制度の改善が

求められる。保育内容の充実とともに，今後とも改善に向けての物理的な条件を検討していきたい。

参考文献

- 1) 日本保育学会編『よりよい保育の条件』，フレーベル館，1986
- 2) 村山祐一『もっと考えて！！子どもの保育条件～保育所最低基準の歩みと改善課題～』，新読書社，2001

（平成19年9月18日受理）

